

プロジェクト中間報告 文法史

橋本修 (筑波大学)

1 複文研究の史的研究総論 若干の研究史含む

1-1 1980年代まで

活用研究の一部

接続助詞の研究

表現論・モダリティ(陳述)論の一部

等

包括性・理論性について、現代語研究に比べテンポが遅れる傾向は否めない。

各論としては現在でも有効、実際に脈々と継続、発展

阪倉篤義 1993

小林賢次 1996

※石垣謙二 1955 はある意味突出している。ただし「準体句への注目」「あるタイプの節と単文とでは格付与のありかたが異なるということへの注目」は初期から高い。

- ・個別論の蓄積が後代の理論的成果を後押し
- ・単文→複文 文の中核→外側 という研究進展の傾向 (cf.高山 2002)
- ・古文解釈のための文法→言語現象そのものの記述・説明のための文法という、ゆるやかな流れ

1-2 1980年代～

1-21 階層的把握(踏み込んだ統語論)の推進、ただし単文がメイン

北原保雄 1982 他

高山善行 1987 他

述部の(主として)モダリティ形式の階層的把握、特定の節における出現の可否をデータとして利用

(01) …参りたまはむことをのみなむ思しいそぐめれば、ことわりに見たてまつりはべるなど…

○原因・理由節(已然形バ)の節にメリ・ナリ・ベシ・マジは生起するが、ム・ラム

・ケム・マシ・ジは生起し(てい)ない

※南 1974 の（潜在的・顕在的）影響力

「ある要素があるタイプの節に出現できるか否かというテスト」の浸透

「階層」「サイズ」が目に見えやすいという従属節の特徴

※「複文（従属節）／単文に特有の現象」への注目度の増加（→高山 2005、Yanagida2006、山田 2010 他へ）

1-22 広義技術上の変化

「どういう用例がないか」への興味が増大（理論・知見の恩恵で、「問題にできるようになってきた」というべきか）

現代語研究・他言語の研究の成果の直接的援用に対する抵抗の軽減

事実上の現代語訳的解釈に対する抵抗の軽減

鈴木泰 1992 他

Feyerabend (1975) の共訳不可能性への遠慮のようなものが緩やかに払拭され、タイポロジー、対照研究への意欲が高まっていったと見るべき？

コーパス利用の始まり、徐々に浸透

異文等の揺れに対する見積もりの安定、誤差と見ることへの抵抗の軽減

日本人の古典離れ、古典研究離れが、逆に新しい古典語研究、文法史研究を後押しした面もないとは言えない。

1-3 2000 年～

1-31 一般言語学、生成論的な「統語論」の適用の普及

金水 1995、近藤 1997、柳田 2006 他

能格性の検討

…連体節内では非動作自動詞の主語は常に動詞に隣接して現れる。…一方、主文に現れる場合は隣接条件を満たす必要はない（柳田 2006）。

(02) 夕さらずかはづ鳴く瀬

(03) 真木立つ荒山道

(04) 萩の花今か散るらむ

1-32 連文との関わり

近藤泰弘 2005 他 岩田美穂 2007 他 衣畑智秀 2007 他

1-33 文法化・文法機能の変化

福嶋 2011 他 青木博史 2005 他 宮地朝子 2010 他

1-34 対照研究、タイポロジー（方言類型も含む）

現代語との対照という意味では、非常に普通になった

タイポロジー 堀江・パルデシ 2009

方言の複文類型論は、活用類型論以外はまだ端緒的狀態か

1-35 技術的にはコーパスの電子的利用のさらなる進展

研究進展のスピードが加速。

（粗いということはあるが）通史を描く研究が増えてきた。

著作権の問題は、作品自体には少ない。現代語訳については問題が出る。

個人レベルの利用が中心なのが問題点か

2 ケーススタディ

橋本・渡辺 2010

上代・中古語の非制限的連体修飾節が、現代語に比べ一部のタイプを欠いているという可能性

2-1 現代日本語における非制限的連体修飾節の規定・特徴付け

1980年代以前

日本語連体修飾節に制限／非制限の区別を認める意義があまり問題にされていなかった時期

2-11

神尾 1983、三宅 1992

代（用）名詞「の」の分布、疑問詞・NPI の分布制約から、構造的に制限・非制限の区別が可能である見通しが立った

2-12

益岡 1995

非制限的連体修飾節の分類（記号番号は本稿がつけたもの）

A 主節で表されている事態に対する情報付加

A1 「対比・逆接」

A2 「継起」

A3 「原因・理由」

A4 「付帯状況」

B 主名詞に対する情報付加

（さらに、C「情報付加ならざるもの」も立てられるが省略）

2-2 対照研究・類型論

増田真理子 2001、孫海英 2009

中国語において、日本語非制限的連体修飾節の一部が対応しないという現象の指摘
堀江・パルデシ 2009

日本語に比べ、中国語・英語の非制限的連体修飾節の頻度が低いという指摘

(05) a. これを見た先生は、「そうか、何もまったく同じことをさせる必要はない。乙武
ができる範囲で、みんなと同じことをすればよいのだ」ということに気づいた。

<継起> (孫 2009: 60)

b. ?见此情景的高木老师意识到“乙武其实不用必须把动作做得与大家完全一样，只要
在他力所能及的范围内，和大家做一样的动作就可以了”。(孫 2009: 60--61)

→益岡 1995 における A2「継起」タイプの有標性が少しずつ明らかに

→上代・中古語においても（詳細においては当然異なりそうではあるが）継起タイプの非
制限的連体修飾節はほとんど見あたらない

統語論・対照研究・類型論の影響（恩恵）を受けている。

3 展望

3-1 現況のまとめ

単文の文法史と同様（単文よりやや遅れがちであるが）、共時研究の成果を恩恵として生
かしつつ、共時研究にはない興味深さを追求できている。本プロジェクトもこの方向での
研究の推進に貢献している。

- ・言語変化は一時代前の逸脱現象。逸脱現象の価値がよく見える
- ・共時態記述としては不要に見える区別・現象が通時記述としては意味を持つことが多々
ある

ex. 用例数の多寡（が、共時研究では軽視されることがある）

問題点

・「説明」「予測可能性」の難しさ（文法史全般の問題点で、複文に限ったことではない
が）

その中で衣畑 2007 等の、「変化の型の抽出」が（複文でも行われたこと）注目される
将来的には「存在しない変化の型の抽出（変化の型に関する予測可能な制約記述）がで
きればすばらしい

- ・体系性の緩さ、機能的説明の難しさ

ex. 接続表現の構成要素の多さ、体系の曖昧さ

3-2 今後の課題・期待

- ・類型論の深化・広がり

 - 方言類型論にも期待（ただし話し言葉に偏るという制約も）

- ・コーパスの大規模化、利用可能性の増大

 - 用例の有無のチェック・用例群の抽出だけでなく、用例数の量的比較ができるようになるとあらたな進展が見込める

 - ex. 連体ナリ文の出現頻度と現代語ノダ文との出現頻度の比較

 - 各種の節における、主題「ハ」の出現頻度の比較

 - ※NINJAL 通時コーパスへの期待

 - ※形態・統語論情報付きがどこまでどのペースで進むか

- ・古典離れ、古典語研究離れの阻止

 - 文法史研究者が少数言語研究者と同じ状況になるのか、阻止する方法があるとすればどのような方法が考えられるのか（勿論複文のみの問題ではない）

4 参考文献

青木博史(2005)「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3

石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店

岩田美穂(2007)「例示並列形式の歴史的变化ータリ・ナリを中心として」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

神尾昭雄 1983「名詞句の構造」『講座現代の言語 第1巻 日本語の基本構造』

北原保雄(1982)『日本語助動詞の研究』大修館書店

衣畑智秀(2007)「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

金水敏(1995)「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編、くろしお出版

金水敏他編(2011)『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店

小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房

近藤泰弘(1997)「「の」「こと」による名詞節の性質--能格性の観点から」『国語学』190

近藤泰弘(2000)「中古語の準体構造について（文法研究の諸問題）」『国語と国文学』58-5

近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

近藤泰弘(2005)「平安時代語の副詞節の節連鎖構造について（日本語文法史研究の現在）」『国語と国文学』82-11

阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店

鈴木泰(1992)『古代日本語動詞のテンス・アスペクトー源氏物語の分析』ひつじ書房

高山善行(1987)「従属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』6-12

- 高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 高山善行(2005)「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』2-1
- 橋本修・渡辺昭太(2010)「連体修飾・連用修飾の日中対照」ひつじ書房 20周年記念シンポジウムハンドアウト
- 福嶋健伸(2011)「中世末期日本語の～ウ・～ウズ(ル)と動詞基本形 –～テイルを含めた体系的視点からの考察–」『国語国文』80-3
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ(2009)『言語のタイポロジー –認知類型論のアプローチ(認知言語学フロンティアシリーズ第5巻)』, 研究社
- 益岡隆志(1995)「連体節の表現と主名詞の主題性」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 増田真理子(2001)「<談話展開型連体節> –「怒った親は子どもをしかった」という言い方–」『日本語教育』109 日本語教育学会
- 宮地朝子(2011)「名詞キリの形式化と文法化」『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 三宅知宏 1992「日本語の連体修飾構造について」1992年日本語文法談話会ハンドアウト
- 山田昌裕(2010)『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房
- 柳田優子(2006)「古代語における動詞連体形節内の格付与について」Scientific Approaches to Language (神田外国語大学) 5
- 孙海英(2009)『汉日动词谓语句非限制性定语从句对比研究』黑龙江人民出版社
- Feyerabend(1975), Paul Karl "Against Method: Outline of an Anarchistic Theory of Knowledge" (『方法への挑戦: 科学的創造と知のアナーキズム』村上陽一郎, 渡辺博共訳、新曜社、1981)
- Yanagida, Yuko 2006 'Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese' *Journal of East Asian Linguistics* 15